

# 新座市における在宅高齢者の生活実態について

——新座市高齢者生活実態調査より——

古松 弥生\* 宮城 道子\* 木寺 博子\*  
柳 許子\* 横田 京\* 藤井 敏信\*  
佐藤 元\* 狩野 敏也\* 波多野和彦\*

(1991年6月17日受理)

## 1. はじめに

十文字学園女子短期大学高齢者問題総合研究会（代表古松弥生）は、家政学各領域ならびに関連分野の学際的研究活動によって、高齢者の生活を総合的にとらえることを目的としている。この目的にそって、地元新座市における在宅高齢者を対象としたアンケート調査を初めて試みたのは、1984年8月である。高齢者を対象としたアンケート調査には、いくつかの困難や制限が伴う。回答者に質問文を適切に理解してもらえるかどうか、理解されたとして、回答形式の指定（例えば回答数の制限や回答者を限定するサブクエスチョンなど）どおりの回答が得られるかどうかという問題がある。幸いにも、新座市および民生委員の協力を得て、有効回答者数1048名、有効回収率87%の結果を得ることができた。

その後、5年を経過した1989年6月に、前回回答者を主な対象者として、2回目のアンケート調査を実施した。本稿は、この2回目のアンケート調査結果から、新座市の在宅高齢者の現状に関する分析結果を整理・検討したものである。

## 2. 調査の目的と実施概要

### (1) 調査の目的

今回調査の大きな目的は、次の2つである。

- ① 首都圏近郊の住宅地としての新座市における在宅高齢者の生活実態および意識を総合的にとらえること
- ② 前回回答者の生活実態の時系列的変化をみること  
本稿は、主に第一の目的にそった分析結果である。

### (2) 調査の実施と回収状況

調査実施の概要は以下のとおりである。

#### 1) 調査対象者：在宅の男女高齢者

\*前回回答者 1048 名および 65～69 歳の新規対象者 631名。

\*新規対象者の選定にあたっては、前回の調査対象

\* 十文字学園女子短期大学高齢者問題総合研究会

地区（町丁目単位、19地区）を前提とし、同地区に居住する者を原則とした。

#### 2) 調査方法：質問紙留置法

（民生委員による配布、回収）

#### 3) 調査項目：① 家庭生活および家族関係

- ② 暮らし向き
- ③ 健康状態・日常生活動作
- ④ 衣生活
- ⑤ 食生活
- ⑥ 住生活・市内居住経験
- ⑦ 社会生活・余暇
- ⑧ 生きがい
- ⑨ 自立意識・積極的生活態度
- ⑩ 高齢者施策への要望

\*①～⑧は前回調査と同じ設問形式を原則とし、回答者の負担軽減のため、設問数を減らした。

#### 4) 調査実施時期：1989年6月

#### 5) 配布・回収状況：表1のとおり

表1 男女別の配布・回収状況

	男 性	女 性	全 体
配 布 数	544人	752人	1296人
有効回収数	479人	677人	1156人
有効回収率	88.1%	90.0%	89.2%

#### 6) 前回調査からみた再調査率

前回と今回の調査回答者を比較すると、表2のとおりである。

- ① 前回回答者のうち、今回再調査率は6割弱。
- ② 再調査が不可能となった理由は、死亡、入院といった高齢者固有の事情のほか転出もみられる。
- ③ 再調査率は高年齢層ほど下がり、また、性別では男性がやや低い。

しかしながら、調査規模は前回よりやや大きく、性別・年齢別構成比にはそれほど大きな変化はなかった。

表2 性・年代別の再調査率

	1984年調査	1989年調査	再調査率
合 計	1048 (100.0)	1156 (100.0)	58.6%
男 性	435 (41.5)	479 (41.4)	57.5%
65～69	178 (17.0)	229 (19.8)	—
70～74	137 (13.1)	114 (9.9)	64.0%
75～79	79 (7.5)	79 (6.8)	57.7%
80～84	26 (2.5)	42 (3.6)	53.2%
85～	15 (1.4)	15 (1.3)	36.6%
女 性	613 (58.5)	677 (58.6)	59.4%
65～69	238 (22.7)	313 (27.1)	—
70～74	194 (18.5)	171 (14.8)	71.8%
75～79	95 (9.1)	115 (9.9)	59.3%
80～84	66 (6.3)	43 (3.7)	45.3%
85～	20 (1.9)	35 (3.0)	40.7%

注) 年代別の再調査率は、今回の回答者数を前回の1階級下の回答者数で除したものである。85歳以上については、前回80～84歳および85歳以上の合計数で除した。

### (3) 高齢化の進展からみた新座市の特徴

新座市は、埼玉県南部に位置し、東京都練馬区と境を接している。都心から約1時間という、まさに首都圏近郊ベッドタウンの条件を備えている。昭和30年代後半より、人口増加が著しく、昭和45年のピーク時には、社会増だけで年間1万1千人を記録した。近年は増加傾向がやや通減しているが、現在の人口規模は13万人強である。

人口構成は全体に若く、高齢化率からみると、現在6%代で、全国レベル、県レベルよりかなり低い。しかし今後、高度経済成長期の流入人口が高齢化するにつれて、本格的な高齢化を迎えることが予想されている(図1)。

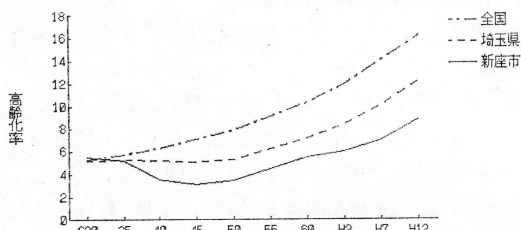


図1 新座市における高齢化率の推移

## 3. 調査の結果および考察

### (1) 個人属性(学歴と職業経験)

性・年代別構成比は、表2でもふれているが、年齢別ピラミッドは、図2のとおりである。

学歴については、表3にみるとおり、過半数が旧制小学校あるいは旧制高等小学校卒である。性別では、男性の方が高学歴の傾向にある。表出はしていないが、年代別にみると年齢が若いほど高学歴の傾向にある。

職業については、壮年期の職業と現在の職業についてたずねているが、性差が大きい。壮年期の職業では、「勤め人」の割合が、男性では6割強であるのに対し、女性では、その半分の3割強である。また、女性で、「その他」や「不明」が多いのは、内職や家業の手伝いなど、この選択肢のなかでは答えにくい人たちが多かったのではないと思われる(表4)。

さらに、現在の収入を伴う仕事の有無についても、男性では、「現在有」が4割に対し、女性は1割強である。ここでも特に表出しないが、高齢層ほど「現在有」の回答割合は減少する。女性において「現在無・以前無」と「不明」が多いのは、壮年期の職業と同様の理由によるものであろう(表5)。現在仕事をもっている人のうち、4割は勤め人となっている。現在・壮年期とも「農業」という回答が1割程度なのは、新座市の従来の農村的基盤の上に、人口としてはそれを上回る流入があ

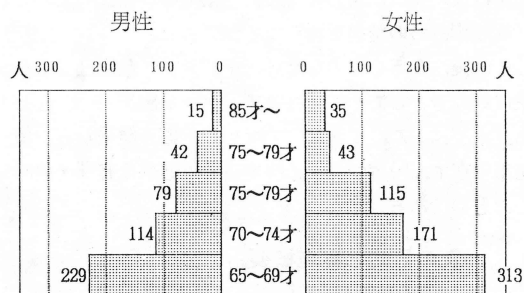


図2 性・年齢別構成

表3 学 歴

	旧小学校	旧高小	旧中学	旧高専	大学	合 計
合 計	276 23.9	327 28.3	339 29.3	93 8.0	73 6.3	1156 100.0
男 性	80 16.7	136 28.4	106 22.1	66 13.8	72 15.0	479 100.0
女 性	196 29.0	191 28.2	233 34.4	27 4.0	1 0.1	677 100.0

注) 上段は回答者数(人)、下段は構成比(%)。無回答、その他は表出していない。

表4 壮年期の職業

	農業	自営業	勤め人	その他	不明	合 計
合 計	146 12.6	149 12.9	548 47.4	198 17.1	115 9.9	1156 100.0
男 性	42 8.8	73 15.2	313 65.3	44 9.2	7 1.5	479 100.0
女 性	104 15.4	76 11.2	235 34.7	154 22.7	108 16.0	677 100.0

注) 上段, 下段の数字は表3と同じ。以下同様。

表5 職業の有無

	現在有	現在無 以前有	現在無 以前無	不 明	合 計
合 計	281 24.3	593 51.3	189 16.3	93 8.0	1156 100.0
男 性	188 39.2	250 52.2	25 5.2	16 3.3	479 100.0
女 性	93 13.7	343 50.7	164 24.2	77 11.4	677 100.0

表6 現在の職業

	農業	自営業	勤め人	その他	不明	合 計
合 計	33 11.7	63 22.4	117 41.6	61 21.7	7 2.5	281 100.0
男 性	13 6.9	41 21.8	91 48.4	41 21.8	2 1.1	188 100.0
女 性	20 21.5	22 23.7	26 28.0	20 21.5	5 5.4	93 100.0

ったという事情を反映するものといえよう(表6)。

さらに、現在仕事を持っている人に、どの程度働いているかをたずねた結果は、男性の7割、女性の5割強が「毎日」との答えである(表7)。また、現在も働いている理由としては、「生活費や家計のため」48.6%の他に「健康のため」41.3%、「生きがいのため」36.2%をあげている人が多いことは、高齢者の就労を考える上で大事な点と思われる(図3)。

表7 現在の働く日数

	毎日	週2 3日	週1 日	気が むく	その他	合 計
合 計	185 65.8	50 17.8	4 1.4	10 3.6	21 7.5	281 100.0
男 性	133 70.7	31 16.5	2 1.1	8 4.3	10 5.3	188 100.0
女 性	52 55.9	19 20.4	2 2.2	2 2.2	11 11.8	93 100.0

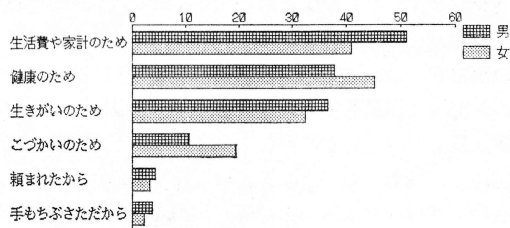


図3 現在働いている理由

## (2) 家庭生活および家族関係

男性の85.6%は配偶者(妻)がいるのに対し、女性で配偶者(夫)のいる人は半分以下の40.8%で、すでに配偶者(夫)が亡くなった人が5割近くである。男女の平均寿命や結婚年齢の違いが、このような形で現れている(図4)。

子供の有無については、男女とも9割以上の人「子供がいる」と答えている(図5)。また、子どもの人数については、子どものいる人の過半数が2人ないし3人であり、4分の1が4人以上となっている(図6)。

次に現在の同居家族について、①高齢者自身が単身

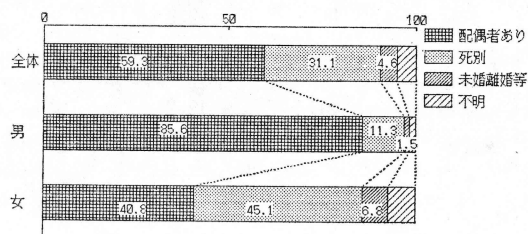


図4 配偶者の有無

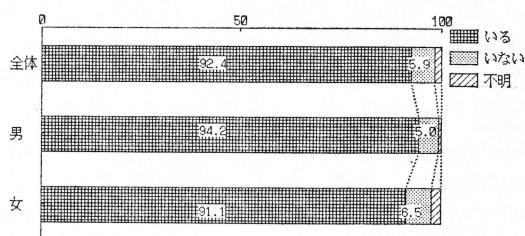


図5 子どもの有無

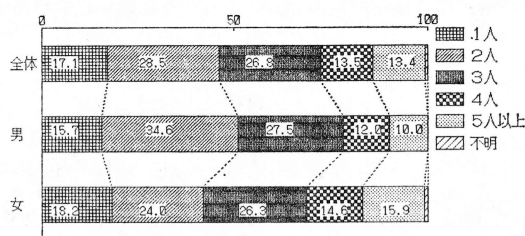


図6 子どもの人数

(シングル) か、配偶者あり (カップル) か、②他の同居家族として、同居家族なし、未婚子同居、既婚子同居の別で6つの家族類型にわけると、男性は「夫婦のみ」36.7%が最も多く、女性は「単身で既婚子と」30.7%が最も多い。男女の別なく全体でみると、「夫婦のみ」26.8%が最も多く、全回答者の4分の1を占めている。次いで「単身で既婚子と同居」(20.1%)、「高齢者夫婦と既婚子同居」(16.3%)、「高齢者夫婦と未婚子同居」(14.3%)といった構成比になっている(表8)。

表8 家族類型別構成比

	男 性	女 性	全 体
回 答 者 数	479人 100.0%	677人 100.0%	1156人 100.0%
単 身	11.1	50.2	34.0
一人暮らし	3.8	11.2	8.1
未婚子と	2.3	8.3	5.8
既婚子と	5.0	30.7	20.1
夫 婦	81.0	40.8	57.4
夫婦のみ	36.7	19.8	26.8
未婚子と	22.8	8.3	14.3
既婚子と	21.5	12.7	16.3
そ の 他	7.9	9.0	8.6

### (3) 暮らし向き

経済面については、生活費とこづかいにわけて、充足しているかどうかをたずねたが、生活費とこづかいによる違いはなかった。いずれも「自分の収入で余裕がある」約2割、「自分の収入でまかなえる」約4割である。6割ないし7割弱の人が、経済的には困窮した状態ではないといえよう。しかし、1～2割の人は同居・別居のいずれかの子どもの援助を受けており、「その他」の回答のなかには、「きりつめてぎりぎりの生活です。こづかいなどはありません」との記入もあった(表9)。「自分の収入」の内容は年金が主と推測される。また、女性のほうが、「同居子からの援助」に頼る割合が高く、さらに高齢になるほど同様の傾向がみられる。働く意欲のある

表9 生活費とこづかいについて

n =	自分の収入で余裕がある	自分の収入でまかなえる	同居子から援助	別居子から援助	その他
生活費 1156	21.5	41.5	16.9	2.9	9.8
こづかい 1156	21.5	46.7	9.1	2.9	8.8

高齢者でも働く場は限られており、収入の道を新たにつくるのは非常に困難なことを考えあわせると、少数とはいえ、経済的自立の困難な高齢者への援助は重要な問題といえよう。

### (4) 健康状態

健康状態については、「現在、身体の具合が悪いところがありますか」という設問をしたところ、全回答者の過半数(56.2%)が「ある」という回答であった。さらにこの「具合の悪いところがある」という回答割合を、男女別の年齢層(5歳区分)による変化としてみたのが図7である。いずれの年齢層においても、女性のほうが「具合の悪いところがある」という回答が多く、かつ、高齢層ほど回答割合が高くなっている。

これに関連して、「昼間よこになることの有無」、「よく眠れるかどうか」、若い頃と比べた「体格の変化」などをたずねた結果が、図8～10である。全体の回答割合をみると、昼間「よこになることはない」という回答が約4割、「よく眠れる」という回答が5割強、若い頃と

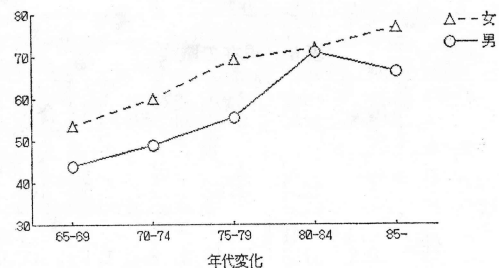


図7 具合の悪いところがあるという回答割合

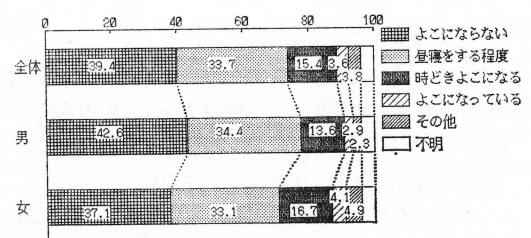
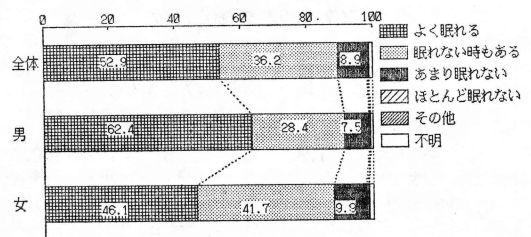


図8 昼間よこになることの有無



注) ほとんど眠れない・その他は1%未満なので表示しない

図9 よく眠れるかどうか



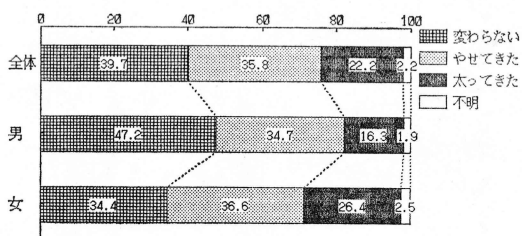


図10 体格の変化

比べて体格が「変わらない」という回答が約4割となっている。男女別では、いずれも男性のほうが回答割合が高い。年代層による変化は、図示していないが、高齢になるにしたがって、健康が損なわれていく傾向にある。

また、「健康のために毎日運動をしていますか」という設問を行ったところ、「毎日している」「時々している」をあわせると、全体の約6割であった。男性のほうが、運動もよくしている傾向がみられた(図11)。また、男女とも70～74歳の年齢層で、健康のための運動を「毎日している」という回答が多くなっている。加齢につれ

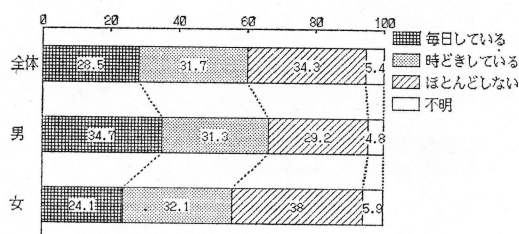


図11 健康のための運動の有無

て、若い頃と同じように健康でなんでもできるというわけにはいかないが、健康保持のための意識的な努力がますます必要になると思われる。ゲートボールのみならず、高齢者の体力に応じた運動のメニューを増やすことが望まれる。

#### (5) 身体機能と日常生活動作

全体的な健康状態とは別に、視力、聴力、言葉(発語能力)、歩行といった身体機能、および、食事、着がえ、掃除、排せつ、入浴といった日常生活動作について、若い頃(40歳頃)と比べた変化をたずねた。選択肢は、第1段階として「若い頃と変わらず～できる」から、それぞれの機能や動作に応じた3段階(第2～4段階)の縮小過程を表わす選択肢と「その他」の5つを準備した(表10)。

回答結果は表11のとおりである。前節でみたように、健康上の問題を抱えている高齢者が多いにもかかわらず、現在、在宅で生活している高齢者が対象なので、いずれの身体機能、日常生活動作においても、第3段階および第4段階の回答は、少数である。そこで、若い頃と変わらないという第1段階から、第2段階へどの程度移行しているかをみると、身体機能では、言語(発語)機能が最もよく保持されており、ついで、歩行、聴力、視力の順である。日常生活動作では、排せつ、入浴、着替えは8割程度、食事、掃除は6割程度が第1段階と回答している。

これらの結果をさらに、性別、年代別にみるために、第1段階の回答割合のみをとりあげて示したのが、図12～15である。男女とも加齢にともなって、身体機能、日常生活動作ともに縮小していくことは明らかであるが、

表10 身体機能および日常生活動作の変化をみる選択肢

	選 択 肢			
	第 1 段 階	第 2 段 階	第 3 段 階	第 4 段 階
視 力	若い頃と変わらず見える	めがねをかければ新聞が読める	めがねをかけても新聞の見出しが読める程度	めがねでも新聞の見出しは見えない
聴 力	若い頃と変わらず聞こえる	普通の声は聞こえる	大きな声のみ聞こえる	耳もとの大きい声のみ聞こえる
言 葉 (発語)	若い頃と変わらず話せる	ゆっくりでないと話せない	言葉もはっきりしない	ほとんど話せない
歩 行	若い頃と変わらず歩ける	歩けるが階段は苦しい	杖を使えば歩ける	ほとんど歩けない
食 事	若い頃と変わらずできる	時間はかかるが普通に食べられる	少し手伝ってもらえば食べられる	介助してもらって食べることが多い
着がえ	若い頃と変わらずできる	やや時間がかかる	ボタン等は手伝ってもらえる	介助してもらわないと着がえられない
掃 除	若い頃と変わらずできる	掃除機よりホウキなどを使うことが多い	小さいホウキなどで簡単にする	ほとんどできない
排せつ	若い頃と変わらずできる	時には失敗することもある	時々失敗する	オムツを使用することが多い
入 浴	若い頃と変わらない	一人で入れるが回数が減った	少し手伝ってもらえば入れる	介助なしには入れない

表11 身体機能および日常生活動作の変化

	1	2	3	4	その他
視 力	139 12.0	863 74.7	88 7.6	16 1.4	36 3.1
聴 力	432 37.4	570 49.3	98 8.5	21 1.8	23 2.0
言 葉 (発語)	961 83.1	146 12.6	25 2.2	3 0.3	6 0.5
歩 行	468 40.5	550 47.6	74 6.4	22 1.9	29 2.5
食 事	713 61.7	391 33.8	12 1.0	5 0.4	20 1.7
着がえ	888 76.8	216 18.7	18 1.6	21 1.8	2 0.2
掃 除	682 59.0	226 19.6	73 6.3	53 4.6	73 6.3
排せつ	991 85.7	104 9.0	14 1.2	15 1.3	15 1.3
入 浴	945 81.7	155 13.4	10 0.9	24 2.1	9 0.8

注) それぞれ全体1156名における回答数(上段:人)と構成比(下段:%)である。無回答は表出していない。

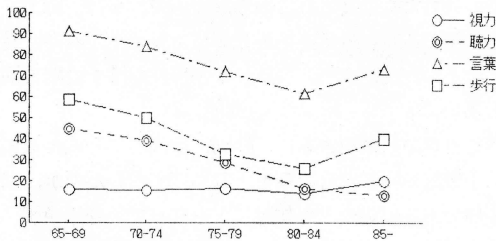


図12 身体機能の縮小過程(男)

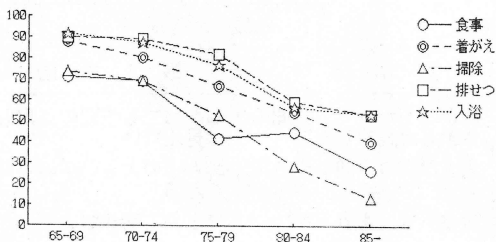


図13 日常生活動作の縮小過程(男)

身体機能において、男性の85歳以上の層のみがこの傾向に反している。男性85歳以上の回答者数は、15名ときわめて少ないので、確定的な解釈を行うことはできないが、男性の最高齢層に、かくしゃくとしたお年寄りの存在がしばしばみられることは、留意しておきたい。また、全体として、第1段階の回答割合が特に小さかった視力については、若い年代から縮小がすすみ、加齢によ

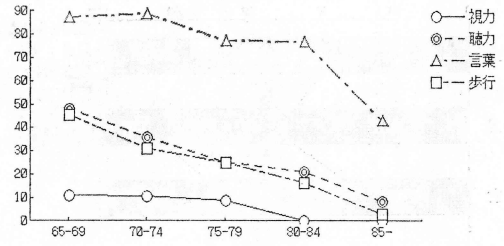


図14 身体機能の縮小過程(女)

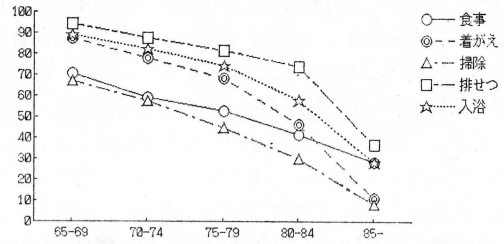
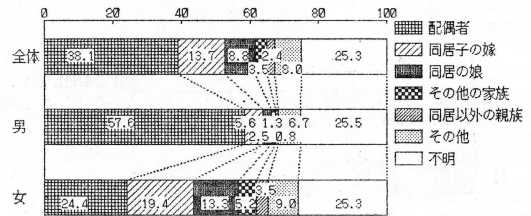


図15 日常生活動作の縮小過程(女)



注) その他には近隣の人・ホームヘルパーも含む

図16 日常生活の主な介助者

る変化が相対的に小さい。4つの身体機能、5つの日常生活動作全体にいえことは、75歳以上層から、加齢変化が大きくなる傾向にあり、前期高齢期(65〜74才)と後期高齢期(75才以上)の違いがうかがえることである。

日常生活で介助が必要な場合の主な介助者は次のとおりである。全体の7割弱が、いずれかの介助者を回答しているが、男女による差が大きい。男性では、6割弱が配偶者(妻)と回答しているのに対し、女性では、配偶者(夫)という回答は、24%にすぎず、「同居の娘」「同居の娘」がそれぞれ19%、13%となっている。女性高齢者の単身者割合が高いことは先にみたとおりであるが、高齢者介助が、妻、嫁、娘といういずれも女性によって担われていることがみてとれる。

#### (6) 身辺自立と家事参加

日常生活のなかで具体的にはどの程度身辺自立ができているのであろうか。まず、身の回りや家事参加への積極性をみると、「できるだけ自分でやりたい」が過半数

を占め、これに「積極的に自分でやりたい」を加えると、8割が積極的な意向を示している（図17）。在宅高齢者全体としては、身辺自立や家事参加にかなり積極的といえよう。これを、性・年代別にみると女性のほうが、より積極的意向を示しており、年代別では年代があがるにつれ、積極性が弱まる傾向にある（図18）。

では、実際の家事参加はどのようになっているかというと、12の家事項目（表12）のうち、実際に行っているものをいくつでも回答してもらったところ、いずれの家事項目についても、女性の家事参加率がより高くなっている。そのなかでも、男性の参加率がやや高い項目は「屋外の掃除、かたづけ」「布団のあげおろし」「部屋のなかの掃除、かたづけ」等であり、衣・食・住に分けるなら、住生活に関わるような家事項目といえる。衣生活・食生活面の家事項目は男性の苦手とするところと推察される（図19）。

身辺自立への積極的意向と実際の家事参加の関連についてみると、家事参加に積極的な意向を示している高齢者のほうが、実際にも家事に参加していることが明らかである。そのなかで、家事参加への積極性の如何に関わ

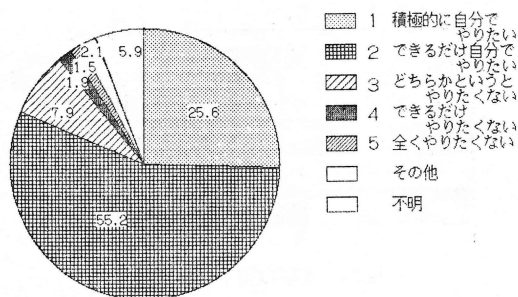


図17 身辺自立への積極性

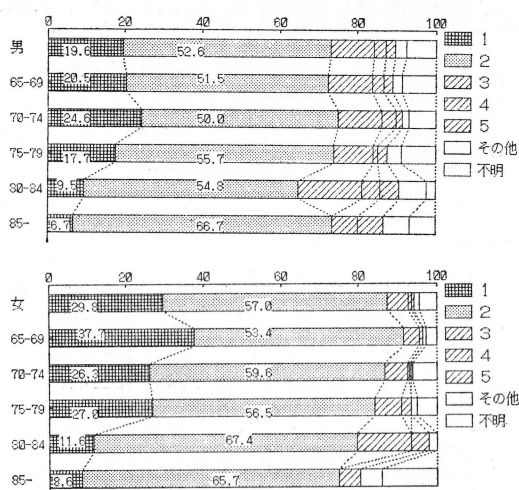


図18 身辺自立への積極性 (性・年代別)

らず、高齢者が参加している家事は唯一「留守番」という結果である（図20）。

表12 家事参加の選択肢と回答結果

選 択 肢	回答者数 (%)
1 部屋のなかの掃除、かたづけ	863 (59.1)
2 庭など屋外の掃除、手入れ	629 (54.4)
3 布団のあげおろし	623 (53.9)
4 ゴミ出し	590 (51.0)
5 下着、ふだん着の洗濯	583 (50.4)
6 留守番	573 (49.6)
7 食事のあとかたづけ	563 (48.7)
8 季節ごとの衣服の入れ替え	544 (47.1)
9 ふだんの買物	483 (41.8)
10 食事の支度	480 (41.5)
11 衣服の繕いなどの手入れ	425 (36.8)
12 乳幼児の世話	44 (3.8)

注) 複数回答。( ) 内は全体1156人に対する出現率。  
 その他は 47 (4.1)、不明は 117 (10.1) である。

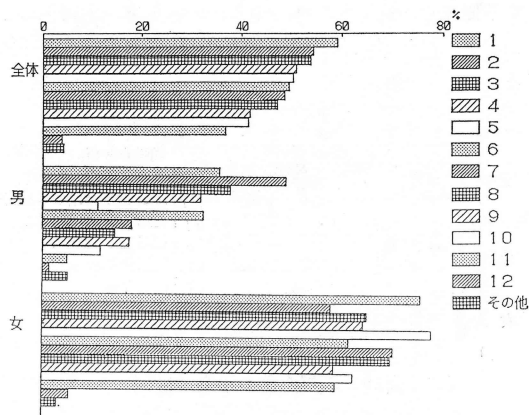


図19 家事参加の実際 (性別)

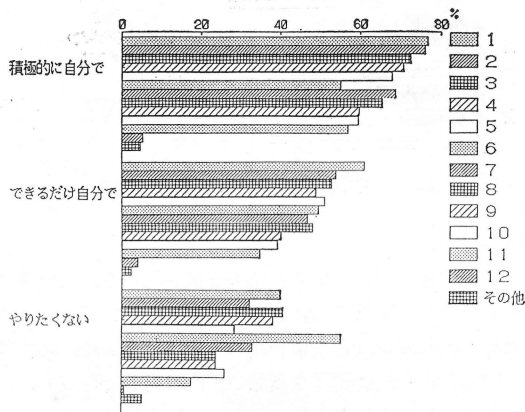


図20 身辺自立への積極性と家事参加の実際

## (7) 衣生活

家事参加の実際についての設問中にも、衣生活に関わる家事項目はあるが、ここでは、誰がふだん着の用意をしているか、ふだん着について不満な点は何かをたずねた。

自分で作ったり、買ったりしている人が過半数（55.5%）であるが、家族に任せている人も35.4%いる（図21）。しかし、男女差が大きく、家族に任せている人は男性58.9%に対し、女性13.4%である。困った点や不満としては、「高齢者用のものを売っている店が少ない」24.6%、「サイズ（大きさ）のちょうどよいものが少ない」23.8%、「色や柄など気に入ったものが少ない」18.7%などがあげられた（図22）。男女別に見ると不満なことはどの項目も女性に多く、特に困ることはないとした男性62.2%に対し、約60%の女性はなんらかの不満を持っている。

服装に関心をもち、自分も周囲の者にも快い印象を与えるような身なりをすることが、日常生活を明るく演出し、積極的に生きる生活の知恵といえる。衣料品を提供する側にも、高齢者の体型や着脱の容易さ、素材面の工夫など、高齢者の潜在的ニーズに応える努力が求められる。

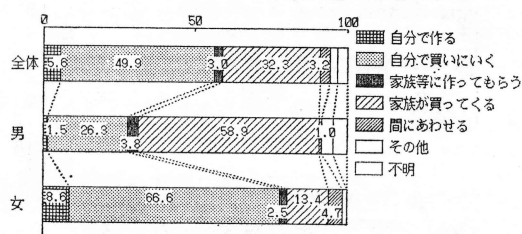


図21 ふだん着の用意（性別）

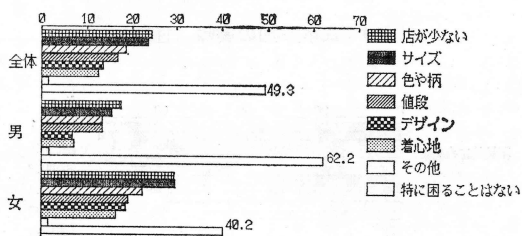


図22 ふだん着についての不満（性別）

## (8) 食生活

衣生活と同様、食生活に関する家事項目も、家事参加の実際についてたずねた設問中に含まれているが、ここでは、①家族の誰と食事を共にするか、その際、②料理は同じものか、③調理や食品の購入を自分で行っているかといった点をみた。

食生活は健康な生活の基本であるが、共に食卓を囲む

ことは、家族のコミュニケーションにも重要な意味をもっているといえよう。食事の相手がなく、一人で食べているという回答割合は、全体の12.9%（男性8.1%、女性16.2%）である（図23）。この回答割合は、男女それぞれの独居者の割合を約5ポイント上回る値である。

回答者の4分の3の人が家族と同じ、あるいはほとんど同じ料理を食べていると答えている。男性のほうが家族と同じ料理を食べているという回答割合が高い（図24）。

また、食品の購入や調理を自分でしたり、時々手伝うという人も6割以上いるが、男女差が大きい。食品の購入においては、女性の過半数が「自分が主にする」と答えているが、男性では1割弱である。調理においても、女性の過半数が「自分が主にする」と答えているのに対し、男性はわずかに6.7%である。ただし、男性における「時々手伝う」という回答割合をみると、食品の購入では、約5割、調理では4分の1となっている（図25、26）。

従来、食事の準備は女性に任されており、男性の有配偶率が高いこともあって、夫婦ともに高齢化しても、食

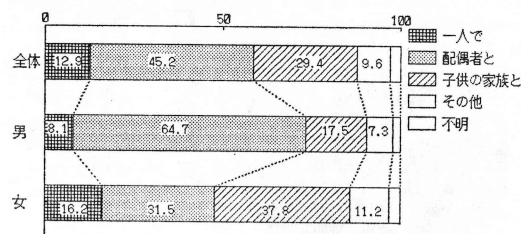


図23 食事の相手（性別）

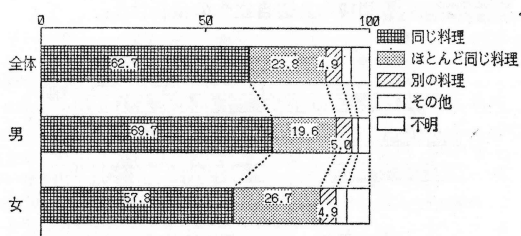


図24 家族の料理との違い（性別）

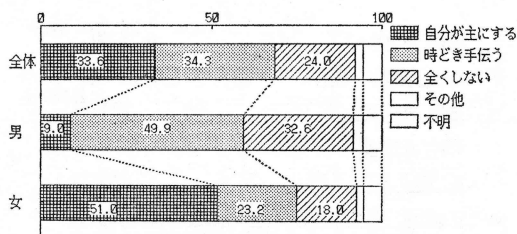


図25 食品の購入（性別）

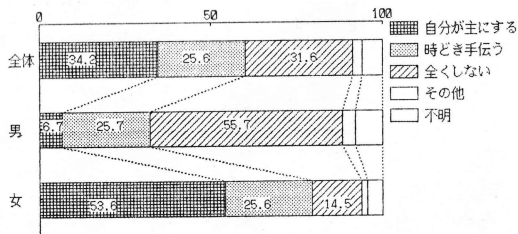


図26 調理（性別）

事の支度は女性（妻）に任されたままになっているものと思われる。男性も、食品の購入を手伝うことからでも、食生活に対する関心や参加の意欲を高めることが望まれる。

#### (9) 家庭・家族における役割

日常生活における高齢者の家庭・家族における役割はどのようなものであろうか。7つの役割および「その他」を用意して、複数回答を得た結果が表13である。「神棚・仏壇の世話や墓参りをする」（50.3%）や「親戚の幸・不幸の席にでる」（46.5%）などの出現率が高い。他の5つの役割は2割ないし3割の出現率であった。

これを性別にみると、男性のほうが高い出現率を示すものは、「家庭の中心的存在である」「親戚の幸・不幸の席にでる」の2つであり、女性のほうが高い出現率を示すものとしては、「財布をあずかって家計のきりもりをする」「神棚・仏壇の世話や墓参りをする」の2つがあげられる。高齢者においても家庭・家族における性別役割分担は明確なものといえる（図27）。

年代別は、表出していないが、70歳代で出現率の高くなる役割が多く、加齢による出現率低下は、80歳以上に持ち越されている。ここにあげた7つの役割は、高齢者固有の役割として担われている傾向にあるといえる。

表13 家庭・家族における役割の選択肢と回答結果

選 択 肢	回答者数 (%)
1 財布をあずかって家計のきりもりをする	302 (26.1)
2 家庭の中心的存在である	385 (33.3)
3 家族のいろいろな相談を受ける	284 (24.6)
4 家庭の年中行事の面倒をみる	271 (23.4)
5 神棚・仏壇の世話や墓参りをする	582 (50.3)
6 家の代表として町内の集まりにでる	202 (17.5)
7 親戚の幸・不幸の席にでる	537 (46.5)

注) 複数回答。( ) 内は全体1156人に対する出現率。  
その他は 74 (6.4)、不明は 133 (11.5) である。

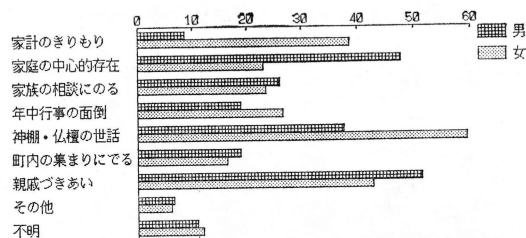


図27 家庭・家族における役割（性別）

#### (10) 住生活・居住経験

住生活および居住経験に関わるものとして、現在居住している住宅の所有と形態、ならびに生育時および働きざかりの頃の居住地をたずねた。

一般的に高齢者の住まいは、平均より高い水準にある。家の所有については9割弱が持ち家（表14）で、そのほとんどは一戸建てである（表15）。

また、表16にみるように、埼玉県外で育った人が8割、壮年期を埼玉県外で過ごした人が7割弱にもなる。男女別にみてもこの点では、ほとんど差がない。男女差がみられるのは、生育時の居住地を「現在の家」とする割合が、男性8.8%に対して女性3.4%、働きざかりの居住地についても「現在の家」とする割合が、男性26.7%に対して女性17.6%であることである。男性のほうが定住性が高い傾向にあるといえよう。

以上のような結果は、昭和30年代から首都圏のベッドタウンとして、急速に人口の増加した新座市の特徴を反映したものであり、現在、新座市に居住している高齢者

表14 現在居住している家の所有形態

所 有 形 態	回答者数 (%)
持 ち 家	1009 ( 87.3)
公的賃貸住宅 (公社・公団や県営・市営住宅等)	7 ( 0.6)
民間の賃貸住宅	93 ( 8.0)
社宅・官舎など	2 ( 0.2)
そ の 他	16 ( 1.4)
無 回 答	29 ( 2.5)
全 体	1156 (100.0)

表15 現在居住している家の建築形態

建 築 形 態	回答者数 (%)
一戸建て平屋	176 ( 15.2)
一戸建て二階造り	880 ( 76.1)
共 同 住 宅	64 ( 5.5)
そ の 他	12 ( 1.0)
無 回 答	24 ( 2.1)
全 体	1156 (100.0)



表16 生育時と働きざかりの時の居住地

居住地	回答者数(%)	
	生育時	働きざかり
現在の家	65 ( 5.6)	247 ( 21.4)
同 町 内	45 ( 3.9)	40 ( 3.5)
それ以外の新座市	29 ( 2.5)	20 ( 1.7)
新座市以外埼玉県内	79 ( 6.8)	44 ( 3.8)
他 県	917 ( 79.3)	759 ( 65.7)
無 回 答	35 ( 3.0)	46 ( 4.0)
全 体	1156 (100.0)	1156 (100.0)

の多くは、都市近郊に住宅を求めて、移り住んできたといえる。

日本では、ライフステージによって、住まいを移り変えていくことが比較的少ないといわれていることから、高齢者にふさわしい住居や同居家族との住空間の使い分けをどのような方向で考えているのか、今後の課題といえよう。さらに、地域で生まれ育った人々と異なり、地域コミュニティとのつながりも弱いことが予想される。在宅高齢者にとって、家庭・家族のみならず、地域におけるサポートやケアの重要性が増しているが、この点でも課題は大きいと考えられる。

#### (1) 社会生活への関心

高齢者の社会生活への関心をみるために、地域活動への参加意向と参加を希望する具体的な地域活動の種類をたずねた。さらに、新聞とテレビに代表されるマスメディアとの接触程度および関心分野をたずねた。

図28および図29にみるとおり、男性の41.1%、女性の25.0%が、機会があれば地域社会に役立つ仕事や奉仕をしたいと考えている。

地域活動への参加を希望すると答えた高齢者に、参加を希望する具体的な活動内容をたずねた結果は、表17のとおりである。全体としては、「老人クラブなどで人の世話をする」34.4%、「町内会の仕事をする」27.6%、「趣味をいかして、けいこごとを教える」20.5%などの希望が比較的高い。

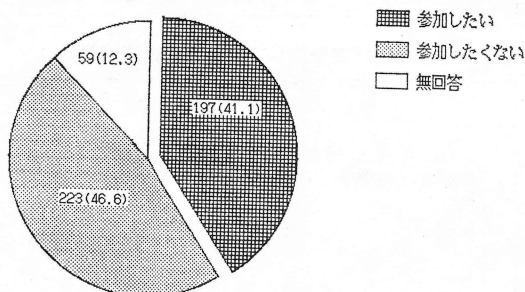


図28 地域活動への参加意向 (男性)

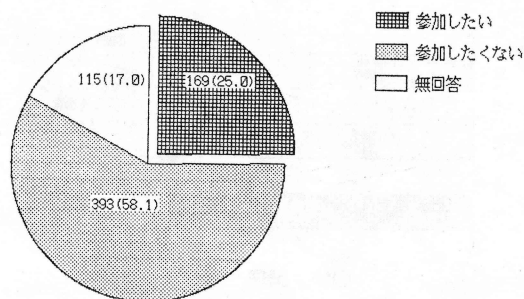


図29 地域活動への参加意向 (女性)

表17 参加を希望する地域活動の種類

地域活動の種類	回答者数 (%)
町内会の仕事 (役員など) をする	101 ( 27.6)
子ども会などの世話をする	22 ( 6.0)
老人クラブなどで人の世話をする	126 ( 34.4)
婦人会で世話役をする	13 ( 3.6)
子どもたちに勉強を教える	20 ( 5.5)
趣味をいかしてけいこごとを教える	75 ( 20.5)
スポーツや武道を教える	13 ( 3.6)
介助・介護などのボランティア活動に参加する	43 ( 11.7)
その他	67 ( 18.3)
無 回 答	26 ( 7.1)
全 体	1156 (100.0)

注) 複数回答なので (%) は出現率。

また、具体的な活動内容には、男女差があり、男性は「町内会の仕事をする」36.0%、「老人クラブなどで人の世話をする」31.5%を希望しているのに対し、女性は「老人クラブなどで人の世話をする」37.9%の他に、「趣味をいかして、けいこごとを教える」24.9%、「介助・介護などのボランティア活動に参加する」18.9%などをあげている (図30)。

新聞を読む程度については、図31にみるとおり、全体の3割弱が「じっくりと、すみからすみまで読む」と答えており、「ざっと読む」5割、「見出しを読む」1割をあわせると、9割もの高齢者が新聞を読んでいる。男女別では、男性の方がよく読んでいる傾向にある (図31)。

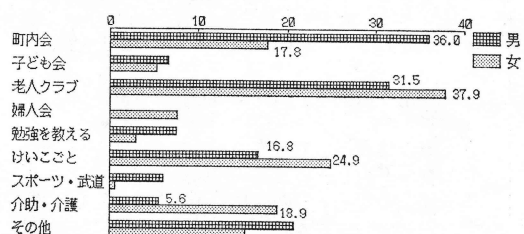


図30 参加を希望する地域活動の種類 (性別)

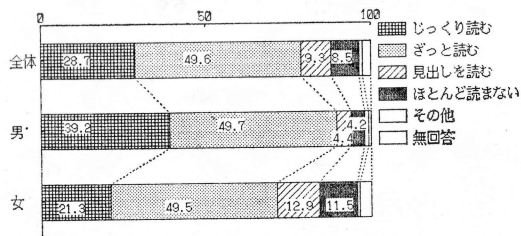


図31 新聞を読む程度（性別）

欠かさず読む新聞記事としては、男性は「第1面」、「政治面」、「国際問題や海外ニュース」、「経済面」をあげているのに対し、女性は「家庭面」をあげている。「社会面」は男女共によく読まれている（図32）。一般社会に関する情報源として、新聞は手ごろであり、よく読まれているが、男女による関心分野には顕著な違いがあるといえよう。男性の方が、より社会的な関心が強いようである。

テレビもよくみている。「4時間位」「5時間位」「5時間以上」をあわせると半数近くにもなる。新聞とは反対に女性の方が長時間みている傾向がややみられる（図33）。興味をもってみているテレビ番組にも、男女差が明白であり、男性は「ニュース番組」をよくみているのに対し、女性は「実用的番組」「娯楽番組」の回答が増える傾向にある。なかでも、「どの種の番組ということではなく、まんべんなくいろいろ見ている」という回答が女性に多い（図34）。男性のほうが、目的をもって番組を選択している傾向にあるといえよう。

以上の結果から、社会全体に対する関心は、男性のほうが高いといえるが、参加を希望する具体的な地域活動

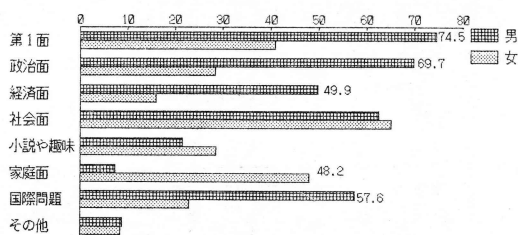


図32 欠かさず読む新聞記事（性別）

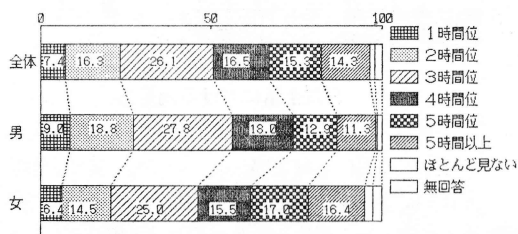


図33 テレビ視聴時間（性別）

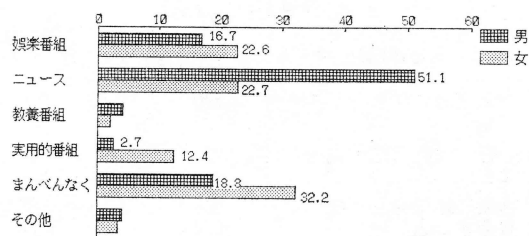


図34 興味をもって見るテレビ番組（性別）

にみられるように、身近な地域社会への参加の機会、女性のほうが多様であると推察される。職業生活中心の人生を過ごしてきた男性が、定年退職後に地域への参加機会を持ちにくいということは、一般的にも指摘されているところである。居住経験においてみたように、新座市の高齢者は、新住民主体であることを考えあわせると、男女を問わず、地域活動へ参加しやすい環境を整える必要があることを強調したい。その際に、男性の社会関心の高さは肯定的な材料となりえよう。

## 12) 精神生活と満足感

高齢者の精神生活に関わるものとして、「生きがい」ならびに「日常生活で大切にしているもの」をたずねた。さらに、「日常生活における満足感」や「同世代の人と比べた幸福感」などの結果から、精神生活における充足感といった側面をみる。

「生きがい」については、9つの選択肢および「その他」を用意して、3つまで回答してもらった。上位3項目については、男女差はほとんどなく、「健康に暮らすこと」、「一日一日を大切に生きる」、「他人に迷惑をかけないで暮らすこと」などがあげられた。4位以下の項目には、やや男女差がみられ、男性のほうが出現率が高いものとしては、「趣味やスポーツに生きる」「働くこと」があげられる。これに対して女性の出現率のほうが高いものは、「神仏をあがめて暮らす」「家庭内で役割を果たす」などがあげられる（表18）。生きがいの主要な部分においては、男女差がみられないにもかかわらず、男性では自己実現的な生きがいが付け加えられているのに対し、女性では他者依存的な生きがいが付け加えられていることは、現在の高齢者のこれまでの人生において、重要視されてきた役割の反映が感じられる。

「日常生活で大切にしているもの」についても、8つの選択肢と「その他」を用意して、3つまで回答してもらった。「生きがい」と重複する点もややあるが、結果は表19のとおりである。全体の出現率の高い順に表出しているが、男女による順位の違いはほとんどみられない。「家族」が8割弱、「自分の生活」が6割と、男女ともに高い出現率を示している。男性ではこの2つに次いで「お金・財産」4割強、「友人」、「宗教心・信仰」

表18 生きがい（性別）

生きがいの選択肢	男 性	女 性	全 体
健康に暮らすこと	420 87.7	585 86.4	1005 86.9
一日一日を大切に生きること	275 57.4	399 58.9	674 58.3
他人に迷惑をかけないで暮らすこと	256 53.4	380 56.1	636 55.0
子や孫を囲む生活	128 26.7	198 29.2	326 28.2
神仏をあがめて暮らすこと	65 13.6	136 20.1	201 17.4
家庭内で役割を果たすこと	35 7.3	102 15.1	137 11.9
趣味やスポーツに生きること	77 16.1	49 7.2	126 10.9
働くこと	63 13.2	33 4.9	96 8.3
地域や社会に役立つことを考えて暮らすこと	39 8.1	23 3.4	62 5.4
その他	5 1.0	7 1.0	12 1.0
無回答	15 3.1	22 3.2	37 3.2
全 体	479 100.0	677 100.0	1156 100.0

注）3つまでの複数回答。上段は回答者数（人），下段は出現率（％）。

「夢や希望・趣味」が2割代の出現率となっているのに対し、女性では、「お金・財産」、「友人」、「宗教心・信仰」の3つが3割代で、「夢や希望・趣味」は2割を下回っている。いいかえるならば、男性のほうが高い出現率を示すものとして「家族」、「お金・財産」、「夢や希望・趣味」があげられるのに対し、女性のほうが高い出現率を示すものは、「友人」、「宗教心・信仰」ということになる。「宗教心・信仰」を女性がより重要視していることは、「神仏をあがめて暮らすこと」を「生きがい」としてあげる女性が多かったことと対応している。また、人間関係に関する項目として、「家族」および「友人」があるが、男性の回答が「家族」に集中しているのにたいし、女性では「友人」も増えていることを指摘しておきたい。

次に、「同世代の人と比べた幸福感」であるが、図35にみるとおり、「幸せである」4割強、「やや幸せである」2割強をあわせると、かなり多くの高齢者が現在の状況を肯定的にとらえているといえる。「他の人と同じくらいである」という回答も2割強で、「あまり幸せでない」「幸せでない」という否定的な回答は5%未満である。男女の差はあまり大きくはないが、女性のほうが肯定的といえよう。

表19 日常生活で大切にしているもの（性別）

大切にしているもの	男 性	女 性	全 体
家 族	380 79.3	507 74.9	887 76.7
自分の生活	290 60.5	414 61.2	704 60.9
お金・財産	207 43.2	258 38.1	465 40.2
友 人	128 26.7	257 38.0	385 33.3
宗教心・信仰	126 26.3	233 34.4	359 31.1
夢や希望・趣味	101 21.1	108 16.0	209 18.1
芸術・文化・教育	44 9.2	40 5.9	84 7.3
国家・思想	47 9.8	16 2.4	63 5.4
その他	10 2.1	17 2.5	27 2.3
無回答	10 2.1	22 3.2	32 2.8
全 体	479 100.0	677 100.0	1156 100.0

注）3つまでの複数回答。上段は回答者数（人），下段は出現率（％）。

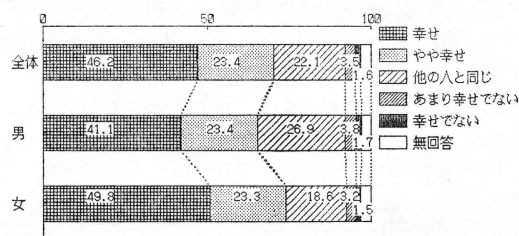


図35 同世代の人と比べた幸福感

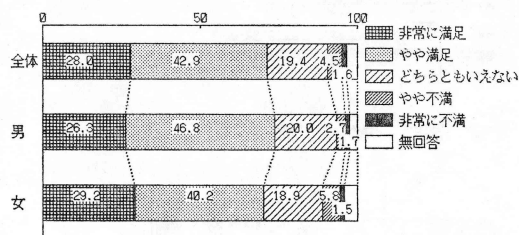


図36 日常生活における満足感

「日常生活における満足感」についても、同様の傾向がみられる。「非常に満足」とするものは3割弱であるが、「やや満足」4割強をあわせると、大部分の高齢者が日常生活に満足しているといえる。「どちらともい

ない」は2割弱で、「やや不満」「非常に不満」はあわせても5%程度である。中間的および否定的回答の構成比も、「同世代の人と比べた幸福感」とほとんど同じである。男女差は「同世代の人と比べた幸福感」よりさらに小さいが、肯定的な回答割合（「非常に満足」+「やや満足」）では、男性のほうがわずかに4ポイントほど大きい、「非常に満足」だけをみると女性のほうがわずかに大きい。

今回の調査結果からみる限りでは、新座市の在宅高齢者の幸福感や満足感はかなり高いといえよう。加齢にともなう変化は表出しなかったが、加齢により幸福感や満足感が高くなる、あるいは低くなるといった一定の傾向は見いだせなかった。男女差もわずかである。高齢者の精神面における充足感が全般的に高い水準にあることは、望ましいことであるが、今後の高齢化の進展にともなって、この主観的評価が継続できるものであるかどうかは、幸福感や満足感を裏付ける要因の分析が必要となろう。

### (13) 自立意識

#### 1) 生活を3つの側面からみた自立意識

高齢者の自立意識をみるにあたっては、①生活の側面毎に自立意識の強さが異なっているのではないかと、および②自立を補う依存の方向として、家族への依存と公的な援助への依存の2つの方向があるのではないかとという仮説をもった。仮説①に関して、一般に高齢者の自立は、身体（生活）的自立、経済的自立、精神的自立の3つがあげられる。それぞれの自立が損なわれた場合、介助・介護、扶養、精神的支援が必要とされるわけであるが、今回はこれにほぼ対応する生活の側面として、健康面、経済面、精神面を想定した。また、仮説②を受けて、生活の側面毎に、自立志向、家族（依存）志向、公的援助（依存）志向の3つの選択肢を設定した。

自立志向……自分自身の努力や責任を強く意識している

家族志向……家族の援助への期待や依存意識が強い  
公的援助志向……公的援助や制度への期待・依存意識が強い

回答者には、生活の側面毎に3つの選択肢から1つだけ、自分の気持ちに近いものを選んでもらった。各選択肢の具体的な内容は、表20のとおりである。

高齢者の回答結果は、表21および図37～40のとおりである。

まず、健康面・経済面・精神面のそれぞれの回答をみると、いずれも自立志向の回答割合が最も高いが、なかでも健康面の自立志向（63.5%）が強く、ついで経済面（51.0%）、精神面（45.2%）となっている。自立志向が減少した分、経済面では公的援助志向、精神面では家族

表20 生活の3つの面と選択肢

	自立志向	家族志向	公的援助志向
健康面	高齢者自身が常に身体を鍛えたり、健康に過ごせるよう配慮、努力することが望ましい	高齢者の介護や健康保持は、家族によって支えられることが望ましい	高齢者の介護や健康保持のための公的な援助が十分あることが望ましい
経済面	老後の生活費は、働けるうちに準備し、家族や公的な援助には頼らないようにしたほうがよい	老後の生活費は、家族に面倒をみてもらうほうがよい	老後の生活費は、公的な援助（社会保障）によってまかなわれるほうがよい
精神面	自分の生きがいや楽しみは自分自身でつくるものだ	家族との交流や思いやりが、高齢者にとってははなよりの生きがいである	高齢者の生きがいや楽しみのために、公的な援助（生きがい対策や施設づくり）が必要である

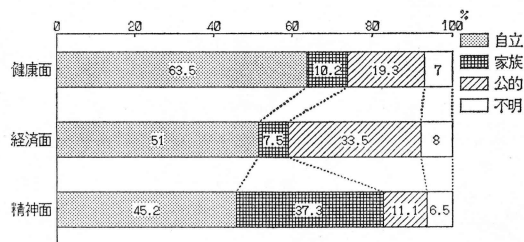


図37 生活を3つの側面からみた自立意識

志向が強くなっている（図37）。

3つの側面からみた自立意識の回答結果を組み合わせると、三面とも自立志向の高齢者が、最も多く全体の26%を占めている。さらに、三面とも家族志向、三面とも公的援助志向は、それぞれ2.7%、4.8%と回答割合はかなり少なくなっている（表21）。

次に、3つの側面からみた自立意識をそれぞれ、性・年代別にみていこう。まず、健康面をみると、性別では男性のほうが10ポイントほど自立志向が強くなっている。年代別では、年代が上がるほどおおむね自立志向が弱まる傾向にある。しかしながら、男性の85歳以上では、この傾向がみられず、自立志向がやや強くなっている。この男性の85歳以上という年代層は、その他の点でもこのような逆転がときどきみられる。前回調査でもそのようなことがたびたびみられ、「かくしゃく老人」の存在として注目される（図38）。

表21 健康面・経済面・精神面の回答組合せ

健康面	経済面	精神面
自立志向 734(63.5)	自立志向 483(41.8)	自立志向 300(26.0) 家族志向 159(13.8) 公的援助志向 21(1.8)
	家族志向 44(3.8)	自立志向 17(1.5) 家族志向 21(1.8) 公的援助志向 5(1.4)
	公的援助志向 191(16.5)	自立志向 103(8.9) 家族志向 67(5.8) 公的援助志向 18(1.6)
家族志向 118(10.2)	自立志向 46(4.0)	自立志向 12(1.0) 家族志向 34(2.9)
	家族志向 34(2.9)	自立志向 3(0.3) 家族志向 31(2.7)
	公的援助志向 36(3.1)	自立志向 5(4.3) 家族志向 28(2.4) 公的援助志向 3(0.3)
公的援助志向 223(19.3)	自立志向 54(4.7)	自立志向 15(1.3) 家族志向 22(1.9) 公的援助志向 15(1.3)
	家族志向 7(0.6)	自立志向 2(0.2) 家族志向 4(0.3) 公的援助志向 1(0.1)
	公的援助志向 154(13.3)	自立志向 46(4.0) 家族志向 52(4.5) 公的援助志向 55(4.8)
回答者数 1156(100.0)		

経済面においても、男性の自立志向が強く、年代があがると自立志向が弱くなる傾向は同様である。年代とともに自立志向が少なくなると、それにかわって増加するのは、経済面で、もともと強い傾向にある公的援助志向である(図39)。

精神面についても、全く同様のことがみられる。自立志向の減少に伴って増加するのは、公的援助志向にかわって、精神面でもともと強い家族志向となっている(図40)。

## 2) 自立意識と生活実態

次に、それぞれの側面の自立意識と関連する生活実態をみる。

健康面については、体の不調の有無と日常生活でよこ

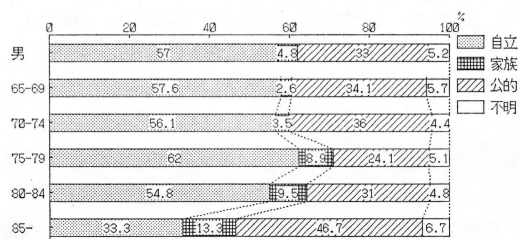


図39 経済面の自立意識(性・年代別)

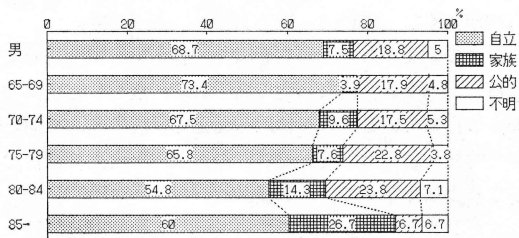


図38 健康面の自立意識(性・年代別)

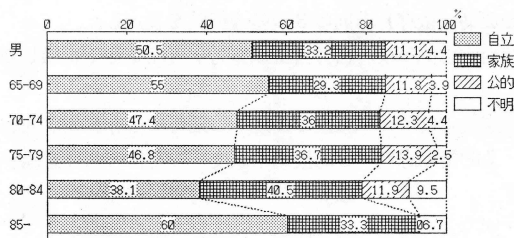


図40 精神面の自立意識(性・年代別)



になることの頻度をみた。自立志向の回答者は、体の不調がなく、日常生活でよくなることもないという回答がふえていることがみられる（図41、42）。

経済面については、生活費およびこづかひの状況をみた。生活費、こづかひともほぼ同様の傾向がみられる。つまり、「自己収入で余裕がある」と「自己収入でまかなえる」という回答をあわせた構成比でみると、自立志向が最も高く、ついで公的援助志向、家族志向となっている（図43、44）。

精神面では、まず子供との同居状況をみると、自立志向と公的援助志向はよく似ているが、家族志向では、同

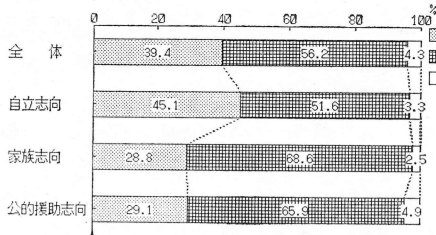


図41 健康面の自立意識と体の不調の有無

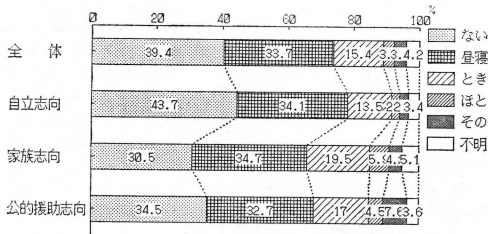


図42 健康面の自立意識とよくなることの有無

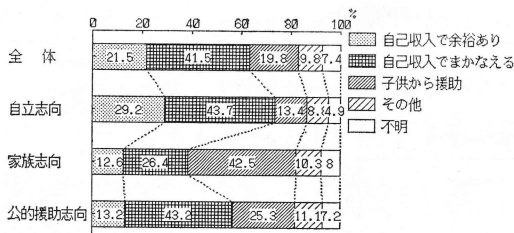


図43 経済面の自立意識と生活費の状況

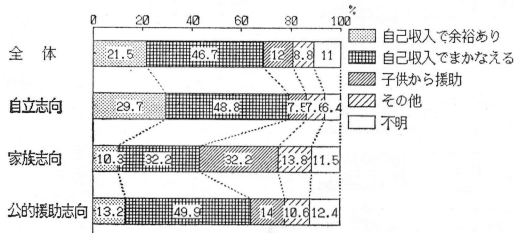


図44 経済面の自立意識とこづかひの状況

居りなしか少なく、既婚子との同居が多いことが明らかである（図45）。

生きがいについても、家族志向のみがやや異なった傾向を示している。「子や孫を囲む生活」の出現率が高く、「趣味やスポーツに生きること」「働くこと」「地域や社会に役立つことを考えて暮らすこと」といった家庭外の活動を生きがいとする出現率がやや低い点である（図46）。

以上みてきたように、それぞれの自立志向と対応する生活実態についてまとめると、自立志向者ほど実態面での自立も確保されている傾向があるといえる。また、3つの志向のなかでは、自立志向と公的援助志向に共通点が多く、家族志向は異なった特徴をもつことが多いといえよう。

#### (14) 生活態度における積極性

高齢者の日常的な生活態度における積極性をみるために、積極的な生活態度を表すと考えられる11の短い文章を示し、それぞれに「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の3つの選択肢のなかから、1つのみ

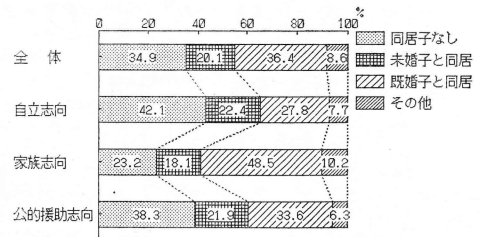
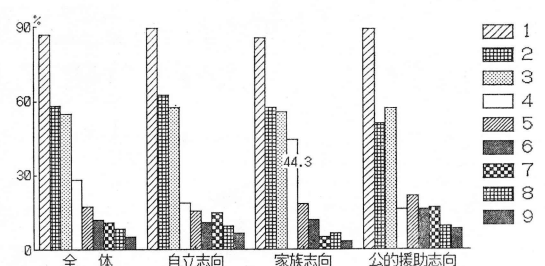


図45 精神面の自立意識と子供との同居



- 1 健康に暮らすこと
- 2 一日一日を大切に生きること
- 3 他人に迷惑をかけないで暮らすこと
- 4 子や孫を囲む生活
- 5 神仏をあがめて暮らすこと
- 6 家庭内で役割を果たすこと
- 7 趣味やスポーツに生きること
- 8 働くこと
- 9 地域や社会に役立つことを考えて暮らすこと

図46 精神面の自立意識と生きがい

回答を得た。11の短い文章とは、以下のア～サのとおりである。文末の（ ）内は短縮した表現である。

- ア 新しい便利な家電製品などは自分でも使いこなしたい（新しい家電製品）
- イ 珍しいものや食べたことのない料理も食べてみたい（珍しい料理）
- ウ 着たことのない色や、流行をとりいれた服でも似合えば着てみたい（流行をとりいれた服）
- エ 世間で話題になっている小説や映画はみてみたい（話題の小説や映画）
- オ テレビ・新聞のニュースや時事問題には興味がある（ニュースや時事問題）
- カ 疑問のあることは人に尋ねたり、自分で調べて、知識をふやしたい（新しい知識）
- キ 自分なりのおしゃれをして、他人と違う個性をあらわしたい（自分なりのおしゃれ）
- ク いままで知らなかった人と知り合うのは楽しい（新しい知人）
- ケ 若い人たちと話をしたり、同席するのはおもしろい（若い人との会話）
- コ 初めてのところへ出かけたり、旅行をするのも苦にならない（未知の場所や旅行）
- サ ふだんの生活で、みなりをととのえるために、鏡

をよくみるほうだ（みなりへの注意）

それぞれの回答割合は図47にみるとおりである。一般に、このような形の設問は無回答割合がふえる傾向にあるが、いずれも7%前後の無回答率でそれほど高くなかった。

「そう思う」の回答割合の最も高いのは、「オ テレビ・新聞のニュースや時事問題には興味がある」（74.5%）であった。最も低いのは、「キ 自分なりのおしゃれをして、他人と違う個性をあらわしたい」（27.2%）であった。

そこで、「そう思う」を+1点、「そう思わない」を-1点として回答者の平均点を算出した。結果は表22のとおりである。得点はおおむね+に偏っており、積極的な生活態度に「そう思う」という回答をした高齢者が上回っていることになるが、11の短文ごとにかなり異なった点数になっている。0点ないしは-1点になっているのは、「ウ 着たことのない色や、流行をとりいれた服でも似合えば着てみたい」と「キ 自分なりのおしゃれをして、他人と違う個性をあらわしたい」の2つである。

全体の得点の高い順に並べ変えて、図48にしたものが、図48である。男女ではやや異なった順位になっている。オ、カ、ア、コのように比較的高い得点順位の短文では、男性のほうが高い得点を示しているが、サ、ウ、キ

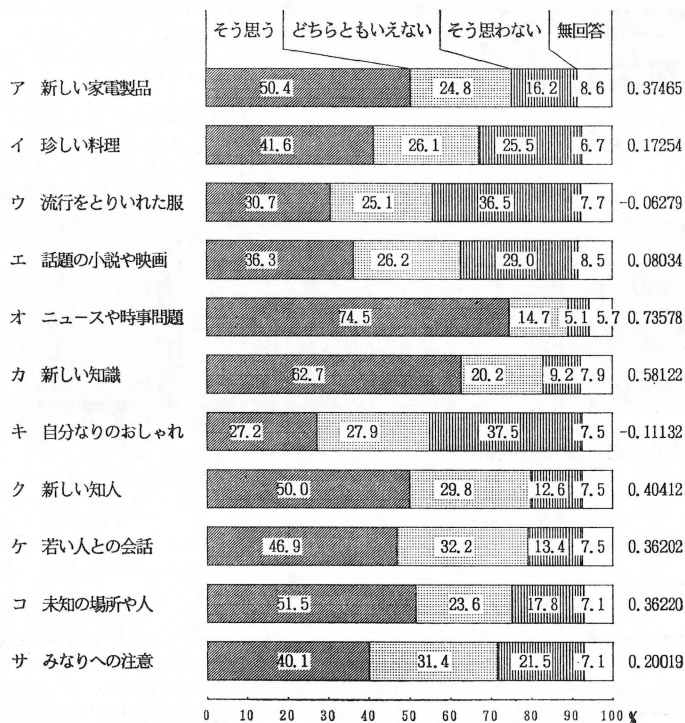


図47 積極的生活態度（全体・回答割合）

表22 積極的生活態度得点（性別）

	男 性	女 性	全 体
ア 新しい家電製品	0.48492	0.29872	0.37465
イ 珍しい料理	0.13318	0.20000	0.17254
ウ 流行をとり入れた服	-0.19863	-0.03180	-0.06279
エ 話題の小説や映画	0.10550	0.06270	0.08034
オ ニュースや時事問題	0.84956	0.65517	0.73578
カ 新しい知識	0.69091	0.50400	0.58122
キ 自分なりのおしゃれ	-0.20920	-0.04416	-0.11132
ク 新しい知人	0.36818	0.42925	0.40412
ケ 若い人との会話	0.34081	0.37721	0.36202
コ 未知の場所や旅行	0.48533	0.27575	0.36220
サ みなりへの注意	0.04308	0.30964	0.20019

といった得点順位の低いものでは、女性の方が高い得点を示している。また、ク、ケ、イ、エの4つは、男女の得点差が非常に小さいという特色がある。つまり、①男性のほうが積極的なもの、②女性のほうが積極的なもの、③男女差のないものとはほぼ3つのグループに分けられることとなる。

次に年齢による影響をみるために、それぞれの積極的

生活態度ごとに図化したものが図49～59である。

オ、カ、ア、コの4項目は男性のほうが積極的な態度を示したものである。いずれの年代でも男性のほうが積極的で、加齢とともに積極性が失われていく傾向にある。そのなかで、「オ ニュースや時事問題」だけが年齢による変化があまり大きくない（図49～52）。

サ、ウ、キは全体としては、女性のほうが積極的な態度を示した項目である。ただし、加齢による積極性の減退は女性のほうが大きく、80歳以上では男女による差が小さくなる傾向にある（図53～55）。

ク、ケ、イ、エは男女差があまり大きくない項目である。「エ 話題の小説や映画」は加齢による積極性の減退が明らかであるが、他の項目では85歳以上の高齢者が積極的な態度を示しているものもある。「ケ 若い人との会話」は年齢による変化があまり大きくない（図56～59）。

図60は、経済面の自立意識と積極的な生活態度の関連を示すものである。上段が男性、下段が女性となっている。項目による差は男性のほうが大きいようである。女性では、自立志向、公的援助志向がより積極的な生活態度を示し、家族志向の場合消極的な傾向がみられる。男性では項目による違いのほうが大きく一定の傾向がとらえにくい、自立志向がより積極的な項目が過半数となっている。

精神面の自立意識と積極的生活態度のグラフは、経済面の自立意識とよく似ている。男性では公的援助志向がより積極的な態度を示す項目が6項目におよんでいる（図61）。

健康面の自立意識では、自立志向がもっとも積極的で、ついで公的援助志向、家族志向という傾向が明らかである（図62）。

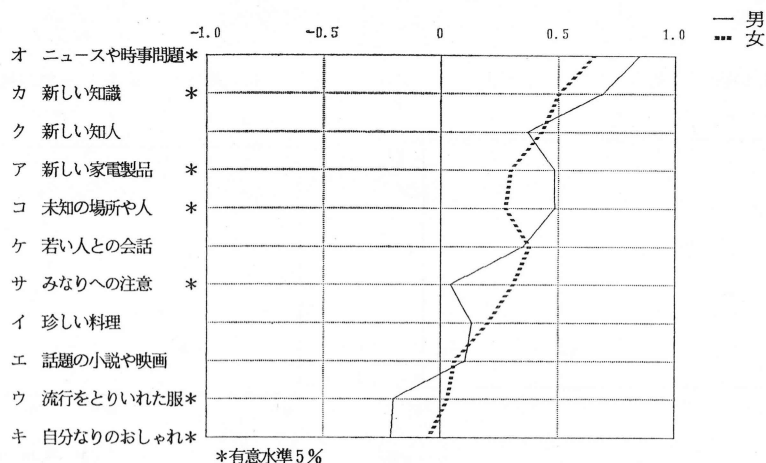
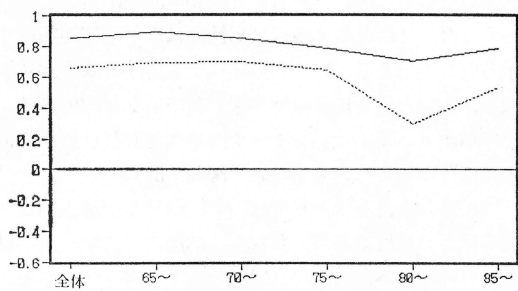
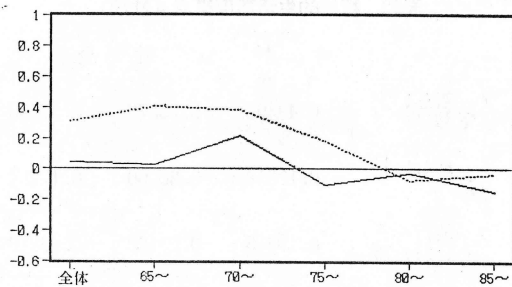


図48 積極的生活態度（性別・得点順位）



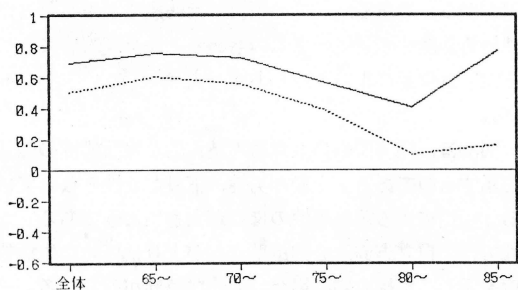
— 男 — 女

図49 オ ニュースや時事問題 (性別・年齢変化)



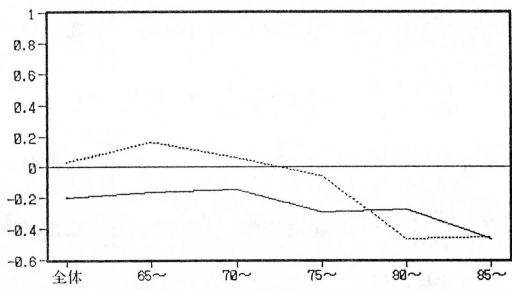
— 男 — 女

図53 サ みなりへの注意 (性別・年齢変化)



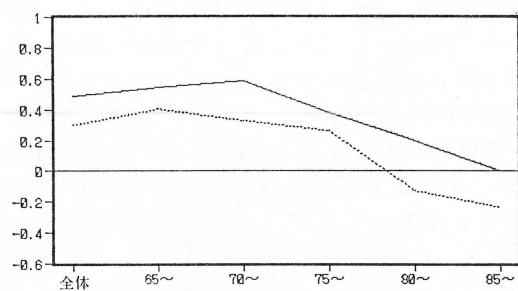
— 男 — 女

図50 カ 新しい知識 (性別・年齢変化)



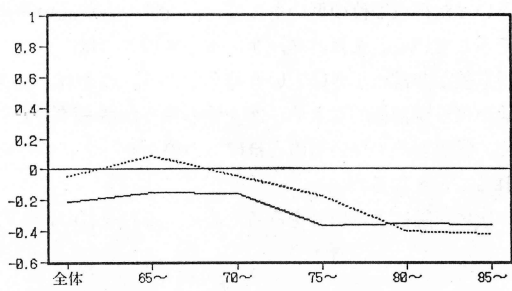
— 男 — 女

図54 ウ 流行をとり入れた服 (性別・年齢変化)



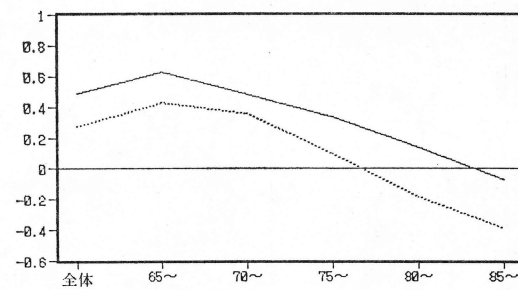
— 男 — 女

図51 ア 新しい家電製品 (性別・年齢変化)



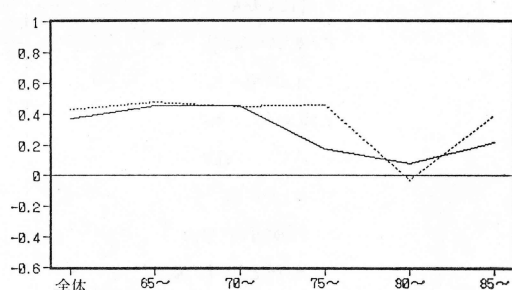
— 男 — 女

図55 キ 自分なりのおしゃれ (性別・年齢変化)



— 男 — 女

図52 コ 未知の場所や旅行 (性別・年齢変化)



— 男 — 女

図56 ク 新しい知人 (性別・年齢変化)

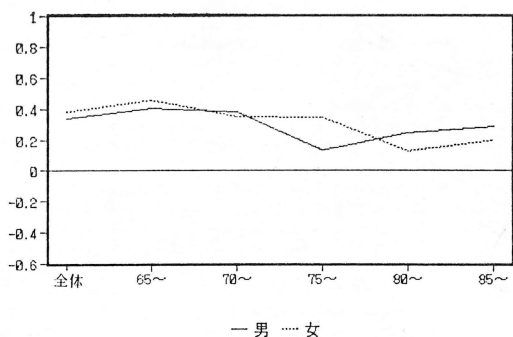


図57 ケ 若い人との会話 (性別・年齢変化)

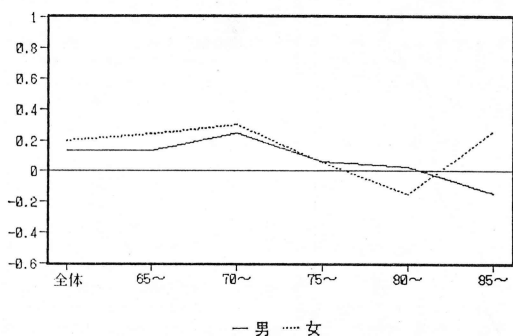


図58 イ 珍しい料理 (性別・年齢変化)

さらに家族類型別にみた積極的生活態度が図63および図64である。

図63は、男性高齢者についてであり、上段は高齢者本人が単身である家族類型、SM (男性独居)、SS (単身高齢者と未婚子)、SC (単身高齢者と既婚子)である。下段は配偶者のある家族類型で、C (高齢者夫婦のみ)、CS (高齢者夫婦と未婚子)、CC (高齢者夫婦と既婚子)である。本人単身類型の方が自立意識による違いが大きい。SMでは、「未知の場所や人」「若い人との会話」「珍しい料理」「話題の小説や映画」などの項目の積極性が高くなっている。

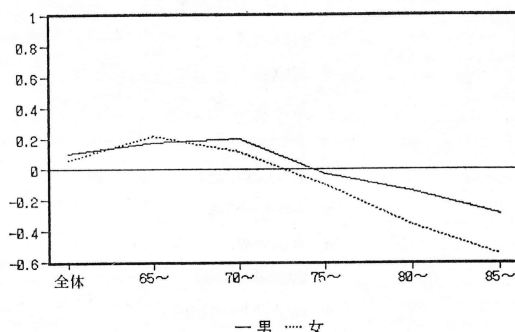


図59 エ 話題の小説や映画 (性別・年齢変化)

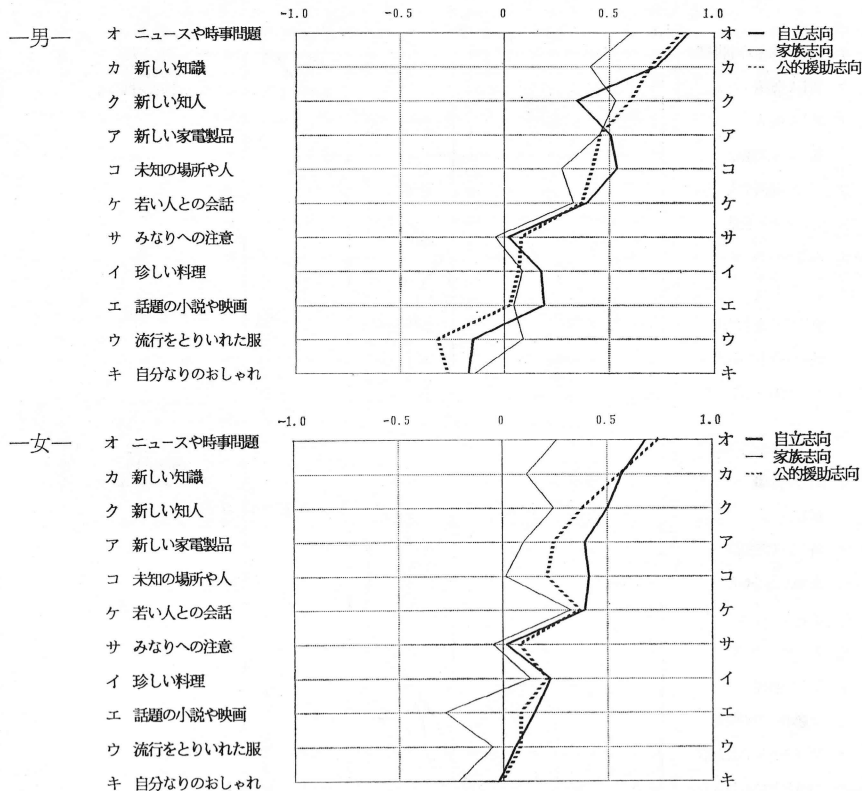


図60 経済面の自立意識と積極的生活態度



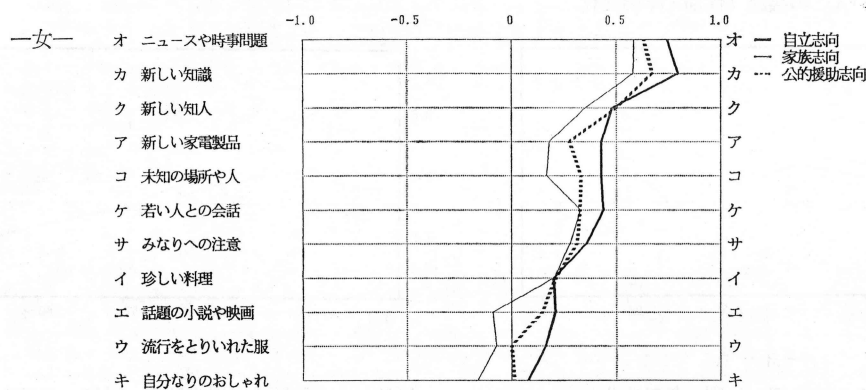
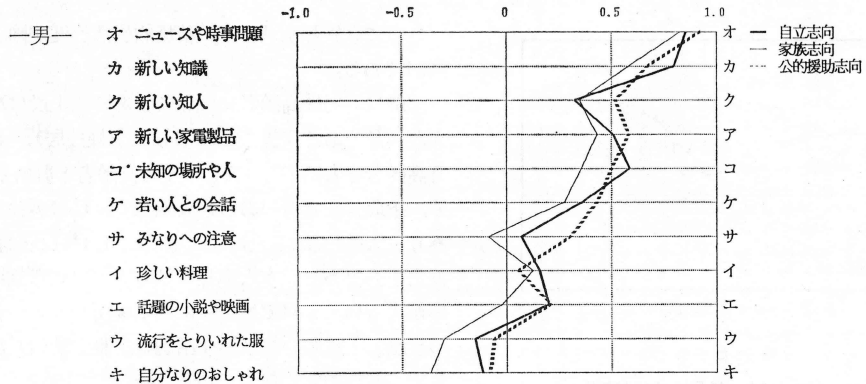


図61 精神面の自立意識と積極的生活態度

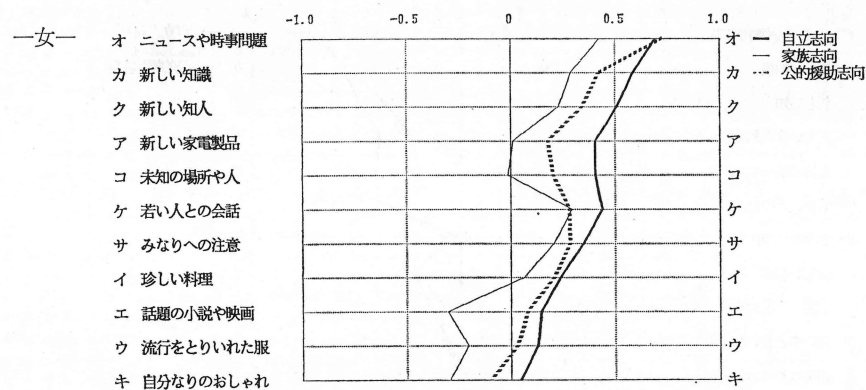
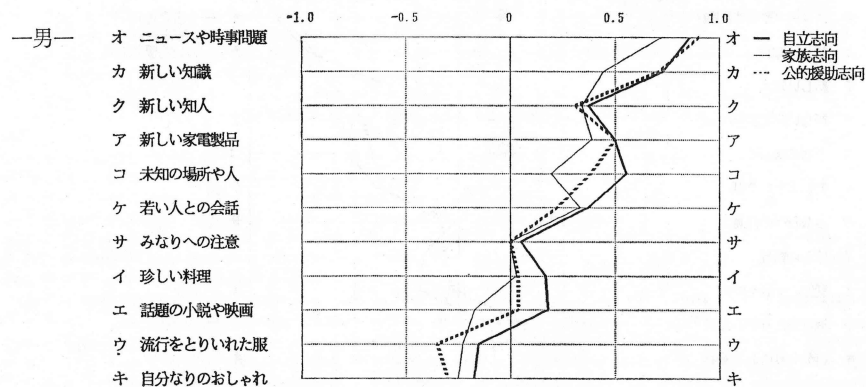
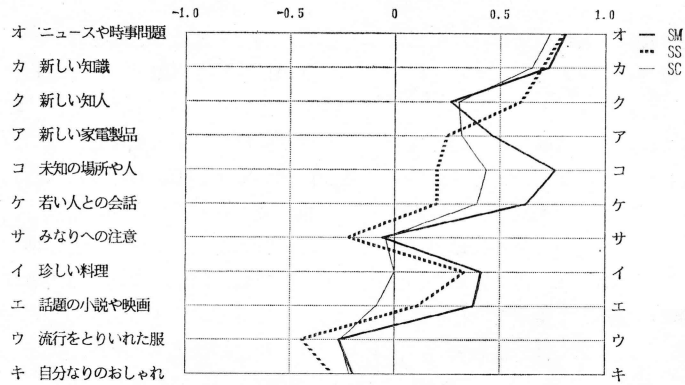


図62 健康面の自立意識と積極的生活態度

一男・本人単身型一



一男・本人夫婦型一

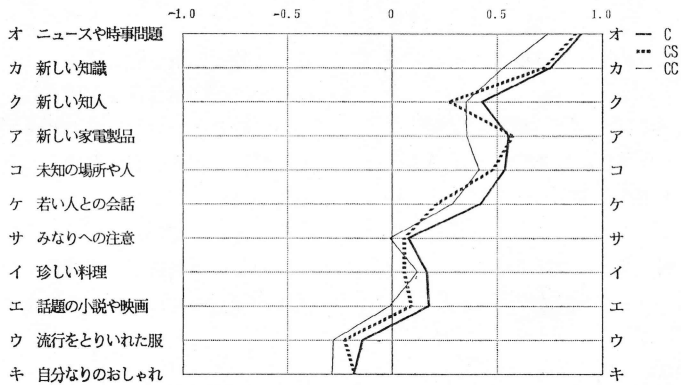
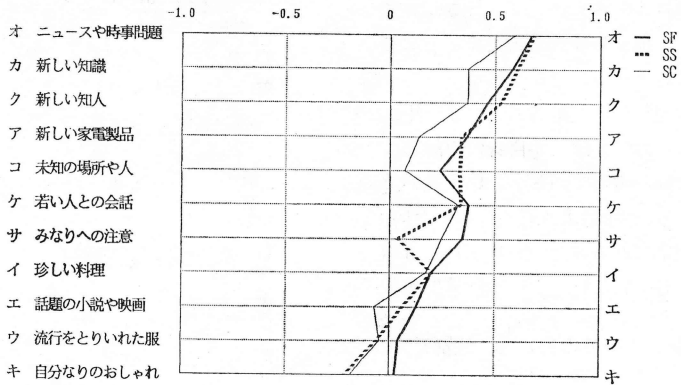


図63 家族類型別にみた積極的生活態度（男性）

一女・本人単身型一



一女・本人夫婦型一

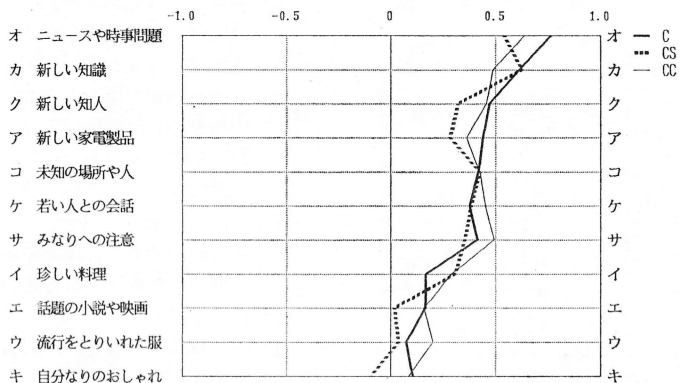


図64 家族類型別にみた積極的生活態度（女性）

同様に、図64は女性高齢者の家族類型別にみた積極的な生活態度である。男性に比べると家族類型による違いは小さくなっている。

以上、高齢者の生活態度における積極性を自立意識との関連からみた結果をまとめると、項目により多少の違いはあるが、一般的には、自立志向の高齢者は積極的な生活態度をもっているといえる。ついで公的援助志向、家族志向ということになろう。高齢者の自立志向をいかにすすめる方策には、高齢者の積極的な生活態度にそったものが効果的と思われる。その意味では、高齢者の生活態度において明らかになった、次のような点が示唆深い。

- ① 在宅高齢者が「ニュースや時事問題」「新しい知識」などに対して、かなり積極的な態度をもっていること
- ② 項目によっては、男性のほうがより積極的な態度をもつものと、女性のほうが積極的なものがあること
- ③ 男女が共通に積極的な態度を示す項目として「新しい知人」「若い人との会話」「珍しい料理」「話題の小説や映画」といった項目があげられること
- ④ 一般的には、加齢によって積極性が失われていくが、「ニュースや時事問題」「若い人との会話」などは加齢による変化が少ないこと

労働や生産の場から引退した高齢者であっても、社会的関心や若い世代とのコミュニケーションをきっかけに、その活力を引き出し、積極的な生活を実現することは、高い可能性をもっているものと考えられる。

積極的な生活態度に関連して、高齢者にとっての年齢規範にかかわる設問を行った。高齢者が自身の年齢についてどのようにみられたいと考えているかという問いである。結果は表23のとおり、「年齢より若くみられたい」が全体の1/4、「年齢相応にみられたい」も同じく1/4で、5割弱は「特に意識していない」という回答であった。

表23 自分自身の年齢についての感じ方（性別）

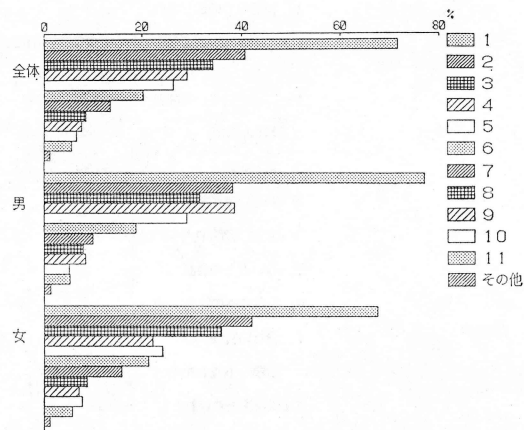
	男 性	女 性	全 体
年齢より若くみられたい	111 ( 23.2)	180 ( 26.6)	291 ( 25.2)
年齢相応にみられたい	121 ( 25.3)	189 ( 27.9)	310 ( 26.8)
特に意識していない	230 ( 48.0)	285 ( 42.1)	515 ( 44.6)
そ の 他	1 ( 0.2)	6 ( 0.9)	7 ( 0.6)
無 回 答	16 ( 3.3)	17 ( 2.5)	33 ( 2.9)
合 計	479 (100.0)	677 (100.0)	1156 (100.0)

た。男女の差はほとんどないが、あえていうならば、女性のほうが「年齢より若くみられたい」「年齢相応にみられたい」がわずかに多く、「特に意識していない」がやや少ない。年齢別を表出していないが、男性では、75歳以上で「年齢より若くみられたい」が減少し、「年齢相応にみられたい」が増加する。さらに80歳以上になると「特に意識していない」が増加する。これに対して、女性では、84歳まであまり大きな変化がないが、85歳以上になると、「年齢より若くみられたい」「年齢相応にみられたい」とともに減少して、「特に意識していない」が増加する。高齢になっても、女性のほうが、年齢を意識しつづけるということであろうか。

#### (15) 高齢者施策への要望

最後に、高齢者自身が望ましいと考える高齢者施策についてみると、男女にかかわらず、「年金制度の充実など高齢者の収入を安定させる」という選択肢に7割もの回答が集中しており、経済面で公的援助志向が強かったことに対応している。

ついで、「高齢者の医療負担を軽くする」「高齢者の健康を守るために医療施設をふやす」「高齢者の働く場



- 1 年金制度の充実など高齢者の収入を安定させる
- 2 高齢者の医療負担を軽くする
- 3 高齢者の健康を守るために医療機関をふやす
- 4 高齢者の働く場をふやす
- 5 生涯を通じた健康づくりを進める
- 6 趣味を楽しんだり、教養を高める場をふやす
- 7 高齢者が安心して暮らせるような住宅をふやす
- 8 高齢者の相談窓口をつくる
- 9 在宅の高齢者の援護をする
- 10 道路や公共の建物などを高齢者が利用しやすいようにする
- 11 ボランティアなど、高齢者が社会に参加できる場をふやす

図65 望ましい高齢者施策（性別）

をふやす」「生涯を通じた健康づくりを進める」「趣味を楽しんだり、教養を高める場をふやす」などがあげられ、それぞれ4割ないし2割の回答割合となっている。

「高齢者の働く場」を望む声のなかには、生きがいとしてという意味もあるが、収入につながるという意味で経済面の援助施策とも考えると、上位6つのうち、2つまでは経済面に関わる施策といえる。この2つは、男性高齢者が強く望んでいる点でも共通している。

また、医療負担や医療施設、健康づくりなどが望まれていることから、健康面での援助施策への関心が強いといえよう。

#### 4. ま と め

在宅高齢者の生活実態および生活意識に関する調査結果をみるにあたっては、東京都近郊住宅地域という新座市の特性を考慮に入れる必要がある。住生活の項でもみたように、壮年期以降に転入してきた高齢者が多く、しかも勤め人が多いということから、地域とのつながりの弱さが想定される。地域活動への参加希望はある程度(31.7%)みられるものの、おそらくは、従来の地域コミュニティの組織原理やルールと、新住民の行動とは若干のくいちがいがあるのではなかろうか。「地域福祉」の重要性が各方面で述べられているが、「地域福祉」実現のためには、まず、地域社会が機能していなければならない。今後、新住民が高齢化するに先だって、高齢者も参加しやすい、新しい地域参加の方法を多様に模索する必要が生じよう。

また、「高齢者の自立を促す」ということが、よくいわれているが、今回の結果からみると、生活の分野、あるいは自立という言葉が使われる場面によって、「自立」の意味が異なることが明らかとなった。高齢者自身の自立志向は全体的に強いことから、この自立志向を活かすようなきめの細かい援助施策が考えられなければならない。例えば、健康面の自立志向が強いことから、高齢者の健康問題を個人の責任に任せるのではなく、定期的な検診などの機会を増やしたり、高齢者が検診や医療を受け安い配慮をすることによって、各人の健康管理を実現するような施策が望まれる。また、高齢者の生活態度における積極性も、加齢や男女によって異なる面と共通の面があることが明らかとなった。高齢者自身の積極性を手がかりとして、結果的に自立を実現することが望ましい。

また、自立が阻害された時の援助をどのように行うべきかを検討することも重要と思われる。家族機能の弱体化がいわれているなかで、在宅介護への期待は高まっているという矛盾した状況である。高齢者の介護を担っている家族への支援はもちろんのことであるが、家族への

依存志向は、精神面を重視するほうが、高齢者にとっての満足感が高く、効果的な場合も充分に考えられる。重い介護負担を家族のみに期待するのではなく、家族が高齢者との精神的交流を図ることができるよう、社会化できる部分、あるいは社会化しなければならない部分を峻別することも必要となろう。

さらに、高齢者の幸福感や満足感はかなり高いものであるが、現在の高齢者は戦中、戦後の混乱期を体験してきたなかで、現在の豊かさを肯定的に受け止めていることも考えられる。高齢者の人生体験そのものは、非常に貴重なものであり、これを若い世代に伝えていくとともに、今後、真の豊かさとはどのようなものか追求していくことも重要と考えられる。

高齢化社会の到来は、福祉負担の増加など、とかく暗いイメージで語られることが多かったが、近年は個人個人が長寿を全うできる時代として、積極的に捉えるべきだとの主張も増えてきている。もちろん、日本の高齢化の進展速度は、先進諸国に比べ著しいものがあるので、社会システムのあり方には課題が山積している。「1.57ショック」と世間を騒がせた出生率の低下傾向も、歯止めがかからず、高齢化の進展はさらに、加速されている。高齢者問題を「困難を抱えた高齢者への援助」という狭い視野ではなく、青壮年を含む広い社会の問題として捉えることが、今まで以上に大切になってくるといえる。

本稿では、今回の調査結果から、新座市の在宅高齢者の現状を分析することを主目的としたので、男女別および加齢による分析にとどまっているものが多い。家政学および関連分野の総合的取り組みのなかから、高齢者問題の総合化をめざす目的からみれば、不足の点は多々ある。今後、各分野毎の分析を深めること、前回調査結果との比較、2回の調査とともに回答してくださった回答者の追跡的分析等、取り組むべき研究課題はいくつかある。また、調査対象者を在宅高齢者に限っているので、施設入所者、あるいは、在宅の通所施設利用者との比較分析といった視点に欠けている。この点も今後の研究課題としたい。

終わりに、今回調査実施については、新座市および下記の民生委員各位の多大のご協力をいただいたことを記して、謝意を表します。

網野敏子 石井幸子 石井タキ子 石井道雄 岩崎市五郎 大橋美知子 岡田朋枝 岡本さと子 加藤喜久 金子財次郎 釜田キミヨ 栗山一憲 小島昭三 小林昭子 斉藤芳香 佐藤國夫 佐藤成三 清水信子 高野ちえ子 高橋正雄 田口美津江 竜山尚之 津田芳造 天日誠一 中條セツ子 中村加津江 中村きみ子 並木勝雄 西村竹柏子 野口要範 橋本恵子 馬場陽子 松田

君江 三浦美智子 水野雅子 三好ヤエ 村上妙子 森  
笠シゲ 森田えい 輪島忠治 渡辺洋子

(敬称略・五十音順)

<関連資料および学会報告>

(1984年調査に関するもの)

- ①昭和59・60年度文部省科学研究費補助金研究成果報告  
書「高齢者の生活形態における変容傾向の家政学的研  
究」1987.3
- ②「家族類型における高齢者の生活形態の分析」『生活  
学会報』第12巻1号30～34頁, 1985.6
- ③「高齢者の健康状態と食生活行動」『日本家政学会関  
東支部会報』第14号2頁, 1985.11
- ④「高齢者の生活行動と圏域について」『生活学会報』  
12巻2号57～59頁, 1985.12
- ⑤「高齢者の身体機能・日常生活動作の変化と家庭生活」  
『生活学会報』12巻2号60～62頁, 1985.12

⑥「高齢者の家族関係の分析—子世代との交流」『生活  
学会報』12巻2号63～66頁, 1985.12

⑦「高齢者の生活満足感と生活信条」『生活学会報』第  
13巻2号31～38頁, 1986.6

⑧「METHOD OF ANALYZING THE AGING  
POPULATION」『十文字学園女子短期大学研究紀要』  
第20集19～25頁, 1989.3

(1989年調査に関するもの)

⑨新座市高齢者生活実態調査速報その1 1989.11

⑩新座市高齢者生活実態調査速報その2 1990.2

⑪新座市高齢者生活実態調査速報その3 1990.6

⑫家政学会第42回大会研究発表「高齢者の自意識から  
みた生活実態—新座市高齢者生活実態調査より」  
1990.5

⑬家政学会第43回大会研究発表「高齢者の積極的な生活  
態度について—新座市高齢者生活実態調査より」  
1991.5